

現代の落首 — 大嘗祭考 —

- 大嘗祭とはなにか？
- 大嘗宮は何故壊されるのか？

再録に際して。

なかなか分からない大嘗祭という祭。以前東京の『川柳人』誌に投稿したものを再掲します。執筆当時から二十九年が経ちました。

当時の投稿名は、“周立東”でした。当時、川柳に疲れて、「撤退」しました。三年前「和川柳社」に復帰、歳が重なり“爺”が付くことになりました。

この稿は、先の平成代替わりの時にまとめた大嘗祭について考察の一端。令和大嘗祭の式次第が進んでいます。昔と変わらず、どの局も大嘗祭の真相に触れることはなく、「秘儀」というだけでまったく分からない。改憲に向けてひた走る日本会議・安倍政権のもと、三権の長が新天皇にひれ伏す姿は明治の姿。日本の天皇制を再確認し、学ぶためにも、「大嘗祭」の真相を知ることが必要ではないかと思い、この稿を再掲します。

2019・11・14 周立東爺（大嘗祭の日に記す）

現代の落首

——大嘗祭考——

落首に共通するのは、その時代のタブーに触れたが故に文字にならず、埋もれてしまう作品である。思想表現の自由を保証されている現代でもタブーは生きている。菊タブーである。

だいじょうやす ぜんなが
大嘗夜据え膳永すぎて早漏

この一句を解説できる人は、大嘗祭についての相当な「もの知り」であろう。

今年（一九九〇年）、大嘗祭がとりおこなわれる。昨年来、憲法の政教分離原則をめぐって国会でも質疑がなされたが、政府・自民党は国費の大浪費を決定した。しかし、国会の論議は大嘗祭に対する国費の使い方が中心で、大嘗祭

とは何なのかまったく分からなかった。その理由の第一に、菊タブーがあるのは明らかであろう。追及する側（野党）も答弁側（政府）も「大嘗祭は宗教的色彩が強い」という認識の一致はあるものの、質問も答弁も抽象的であった。戦前、天皇問題に触れることは不敬罪と治安維持法とで刑死を覚悟しなければならなかった。天皇制打倒を掲げた地下の共産党ですらも、そのスローガンは口頭で言い伝えたという。

大嘗祭とは何か。一般には「天皇が即位後、初めて行う新嘗祭。その年の新穀を以て自ら天照大神および天神・地祇を祀る大礼で、神事の最大のもの」（広辞苑）といわれている。しかしこれは大嘗祭を外側からみた一面である。古来、天皇即位から大嘗祭までの天皇は半天皇とよばれ、半天皇のまま死んだ天皇もいた。半天皇が天皇になる儀式が大嘗祭である。祭には神

が必ず存在する。信じがたいが日本における最大の祭であるこの大嘗祭だけは不思議にも祀られる神は文献的に不明である。名だたる神々が神話に登場するが、大嘗祭の主役である神の名はない。

田中初夫は著書の中で、「残念ながらこの神の御名は文献資料をもつてしては明らかにすることが出来ない。しかし、この神が大嘗祭の祭神の主神であることは疑いない」と述べる（『踐祚大嘗祭』木耳社）。

天皇の事を韓国語では日王、英語ではエンペラー（皇帝）という。しかし十六世紀、フランス国王の統治権の正当性について王権神受説があるように皇帝は神とは違う。しかし日本の「天皇」の議論に「王権神受説」なる発想はない。

三笠宮崇仁は言う。「日本の皇位継承の諸儀式の中で最も重要なのが『おほにへのまつり（大嘗祭）』である。一般には……『神人共食儀礼』といわれている。……しかしそれだけではない。……この祭では……第一の神座は、ほのににぎのみこ

と、つまり『穀霊』が天から下るドラマの舞台だったと考えられるが……穀霊だけとは言えない。神話でほのににぎのみこの子孫が日本の天皇となっているから、そこには『祖霊』が加わっていると見なすべきであり……新帝がそれを身につけることこそ、即位の諸儀礼の中でもっとも重要だったにちがいない」（『踐祚大嘗祭』田中初夫著への序）。ここでは「大嘗祭とは天皇が穀霊と祖霊を身につける儀式」と指摘している。さて、ここに二つの「霊」が登場した。神と呼びかえてもいい。

「祭祀終了後の「直食」は日本の祭式の定式であるが、祭祀進行中における祭祀者の神饌の共食は重大である。つまり、祭祀者が神饌を摂るということは、とりもおさず祭祀者が同時に被祭祀者、即ち神であることを示しているものにほかならないからである」と古代の民俗、宗教

を研究する吉野裕子は指摘する（「大嘗祭・天皇即位式の構造」弘文堂）。戦前、軍国主義教育の中では天皇は現人神と教えたように、天皇は神と同一なのである。いわゆる現人神が天皇の本質である。しかし「現人神」は神の名前ではない。逆に神の名が「天皇」である。前天皇の死去により皇太子が即位し（「半」天皇）になり、その後「天皇」という神になる儀式が大嘗祭である。この点が国会でも議論にならなければならなかったのである。単に宗教色が強いということだけではすまされない。

では天皇という神は何者か。また大嘗祭のどの瞬間に神となるのか。大嘗祭の進行を過去の文献にたよって子細に追究することになるのだが、古典の中で、この大祭の神についての記述は『令義解』職員令中の神祇官の条と神祇令中の即位の条の二カ条のみであるという。また『宮主秘事口伝』に「大嘗会者、神膳之供進第一之

大事也。秘事也」とあるように一番の重要なところが秘密にされ、口伝により執り行われた。前述の田中初夫は、その神は「天神地祇・天照大神・天皇」の三位一体神と推定する。吉野裕子は田中説を踏まえ、古代の政治や習慣を律していた中国からの陰陽五行思想、伊勢神宮の伝承、古代からの琉球王朝、中国、朝鮮などの即位の研究から、田中説の天神地祇を中国古代の全宇宙の絶対神「太一（たいつ）」とする。「太一」は北極星のことである。

古代において、北極星と北斗七星は絶対的な指針であった。北斗七星は北極星を乗せる船である。大嘗祭で天皇が着る着物の背には七つの星が描かれている。つまり大嘗祭で天皇は、北極星（太一・天照大神・天皇霊の三位一体の神を体内に取り入れ、自身が三位一体の神・天皇になるのである。大嘗祭の為に特別に総檜づくりの大嘗宮が建造される。その中心は、意外にも御衾と呼

ばれる寝室である。布団、御坂枕と称する枕、畳が八枚重ねられたベッドなどがおかれている。何故、大嘗祭の中心が寝室なのか。

一般的には降りてきた神が疲れを癒すのにこのベッドで仮眠をするのだとの解釈がある。しかしこれは戴けない。余りにも大がかりな儀式に、仮眠などというものは似合わない。神が起きているうちに「仕事」をしてもらわなければならないからである。実は、これ以上は文字に出来ない理由がある。様々な研究、資料があるが明確に文字にしてあるものはない。しかし容易に推定出来るのである。

古来、「血分けの儀式」というものがあつた。現在でも新興宗教のあるものには、宗祖が信者と性的な交渉をして洗礼を授けるものがある。これは血を受け継ぐきわめて厳粛な儀式である。ようするに大嘗祭は三位一体の神の血を受け継ぐ神聖な血分けの儀式である。その為にベッドが必要不

可欠の道具となる。また目に見えない神とベツドインするわけにはいかない。当然女性の存在が必要になる。大嘗祭にもサカツコと呼ばれる女性が重要な役を演ずる。その女性は「未だ嫁ガズシテ……」とあるように巫女である。ただの巫女ではこの重要な大嘗祭には間に合わない意味がない。一般には知られていないが、そのサカツコに神が宿ると意味される儀式が、伊勢神宮近くで大嘗祭の数日前に行われる。巫女に三位一体神が大嘗祭の前に「降臨」し準備が整う。その後、大嘗祭でのベツドインで天皇が三位一体神となる。

ここまで読むのにおつきあい願った方には、冒頭の一句の意味は氷解するであろう。現天皇は皇太子時代が長かった……。現代においてはこれら総てが儀式化し、象徴化されているであろうが、「秘事也」ということから、ひよつとしてと

いう疑問と興味が残る。

以上が「宗教的色彩が濃い」という内容である。これに何十億もの国費が使われ、大嘗宮は儀式が終われば取り壊される。肯定的に考えれば、この大嘗祭は日本古代民俗の生きた例証である。各地の有形無形の民俗風習保存に公費が使われるのに誰も異議をとないだろうから、その延長上で考えれば、この大嘗祭も規模を大幅に縮小し（たとえば大嘗宮のミニチュアを造り）、国立民俗博物館の主催で行うならば公費の支出も筋が通る。勿論「秘事」も事細かにあきらかにしてもらわねばならない。なお、冒頭の句の作者名は伏せる。銃弾でお見舞いされてはたまらない。（了）

「川柳人」掲載 1990.5

参考資料

「別冊歴史読本」

「図説天皇の即位礼と大嘗祭」（新人物 往来社）

「日本古代の王権と祭祀」（井上光貞東京大学出版会）

「東アジアにおける儀礼と国家」（共著 学生社）

「大嘗祭／天皇即位式の構造」（吉野裕子 弘文堂）

「古代天皇家の渡来 崇神・応神・継体の謎を解く」

（渡辺光敏 新人物往来社）

「日本の歴史」（小学館）

現代の落首・大嘗祭考（その2）

大嘗宮はなぜ壊されるのか？

周 立東 爺

29年前に書いて再録した「大嘗祭考」の論旨は、「即位した新天皇が、ベッドのある部屋に御巫と



建築費 27 億円の大嘗宮

ともに一晩も
り、秘儀を行い、
先帝と天照大神
と北斗七星の三
つの霊を身につ
け、文字通り
“天皇”という
三位一体の現
人神になる”
ことを示した。
大嘗祭の実相

は、単なる「豊作を祝う農耕儀礼」ではなく、明らかな「宗教儀式」である。当時、新憲法で初となる象徴天皇による大嘗祭だったため、憲法20条が定める「政教分離」に違反するとして違憲訴訟が各地で相次ぎ、一九九五年には原告の訴えこそ棄却されたものの、大阪高裁が「政教分離規定違反の疑いを一概に否定できない」と指摘している。

その現場 大嘗宮は終わるとすぐ壊される。不思議である。調べると、元来、一夜の特別な祭りのため儀式が終わったらすぐ撤去する簡素な建物だった。しかし富国強兵策を進める明治政府は天皇を神格化し大規模なものにした。新憲法下では、古来のように質素にすべきだったが、憲法改正を党是とする自民党政権は、天皇を政治利用すべく邁進する。

今回の大嘗宮建築費は、予算で前回の22億余円

から増え、27億余円である。

皇室の意志は明確

この問題について、昨年、皇室側の意志が示された。天皇弟の秋篠宮（文仁）が誕生日の記者会見で述べている。（2018/11）

「大嘗祭については、これは皇室の行事として行われるものですし、ある意味の宗教色が強いものになります。私はその宗教色が強いものについて、それを国費で賄うことが適当かどうか？」

と疑問を出し、政府に再考を求めた。明らかに新天皇の意志を代弁したもので、議論のきつかけにして経費削減にもつながった。しかし安倍総理はそれを無視した。ここではつきりしたのは、憲法を守ろうとしたのは皇室で、憲法違反で天皇を政治利用したのは安倍政権だったことだ。そこで一句。

改憲を睨み現人神にする計算

さて、この稿は、大嘗祭が明けた後、一般に公開した後には解体される「大嘗宮」が、なぜ破壊されるのかの疑問を探ることである。

以前に調べたことがあり、内容は承知していたが、今回、あらためて調べ直し、資料で補強した。中世に作られた法律？『延喜式』というものがある。九〇五年（延喜五年）、醍醐天皇の命により藤原時平らが編纂を始め、『弘仁式』『貞観



式』と改訂を重ね、九六七年（康保四年）より施行されたという。全50巻、約3300条からなる膨大なものである。

日本の社会・



↑ 京都福知山の太原の産屋
↘ 産屋の内部



浜松の産屋

各地に残る産屋

文化において、人々の日常行動を拘束していた基本的観念の一つが、「穢れ^{けが}」で、『延喜式』に「穢」について、詳細に記録し、平安貴族社会の中で生きていた。

『弘仁式』には、人の死と産、六畜の死と産、その肉を食うこと、喪を弔うこと、病人の見舞いに行くことが「触穢^{しよくえ}」として細かく定められ、貴族の行動を決めていた。

この「穢れ」は、死なら感覚的に分かり易いが、「産」についても血が関わることで、「穢れ^{けが}」とつながる。

詳細は省くが、人間に限らず、牛や犬、動物の死などに接したときは祭事が中止になったり（死穢^{しえ}）、中宮の御産で、産穢^{さんえ}が天下に蔓延したとあり、「穢れ^{けが}」が災いを起こすとされて忌み嫌う文化が政治と一体となっていた。

この「産穢^{さんえ}」に注目である。大嘗祭は、「天皇

神」が誕生することである。すると大嘗宮は天皇の産屋^{うぶや}となるのである。誕生には「産穢」がつきまとう。

古来、この産屋はどのように造られてきたか。

東北地方に残る産屋を調べた「国立歴史民俗博物館研究報告」や、参考資料などで、産屋と大嘗宮の繋がりが伝承と共に浮き上がる。しかしどの資料も直接的な記述は極少なく、理解には古代からの「穢^{けが}れ思想」の理解などコツが必要である。

地方により様々であるが、古い使い方は、やはり「産穢」のため、解体、消却している。これが大嘗宮の原型と考えられ、民主主義国家となった現代にも生きている。大嘗祭はこの「宮」の解体をもって完了するのである。

(了)

参考資料

『産屋習俗の終焉過程に関する民俗学的研究』

(板橋春夫)

『大嘗祭 天皇即位式の講造』(吉野裕子)

『大嘗祭の本義』(折口信夫)

『天皇と宮中 祭祀』(山折哲雄)

『大嘗祭と古代の祭祀』(岡田莊司)

『古代日本の穢れ・死者・儀礼』(尾留川方孝)